

紹介

プレプク・アニコー著(寺尾信昭訳)

『ロシア、中・東欧ユダヤ民族史』

二〇〇四年五月一日、中東欧を含む一〇カ国が新たにEUに加盟した。一九九〇年代以降のヨーロッパ拡大の進展に伴い、もはや西欧諸国のみでヨーロッパというタームを説明することは不可能に近い状況となった。近年における西洋史研究の動向を垣間見ても、これまで軽視されていたヨーロッパの「東側」からヨーロッパ史そのものを逆照射する試みが多くなされている。むしろ、このようなヨーロッパに関する歴史認識の変化は、日本の東欧史研究にとって追い風となっている。本書もそのような最近の学問的潮流に倣うものである。

本書は、Prepuk Anikó, *A Zsidóság Középső Kélet-Európában a 19-20. században* (Debrecen, 1997) の邦訳である。著者のプレプクはハンガリーのコッシュュート・ラヨシニシユ大学で教鞭を執っており、特

に二重君主国期のハンガリー系ユダヤ人に関する研究を中心に、優れた業績を残している。ハンガリーにおけるユダヤ史研究の第一線で活躍する歴史家の手による本書の特徴は、概説的ながら、ドイツ、ハプスブルク帝国、ロシア、及び第一次世界大戦後に創出されたそれらの継承諸国におけるユダヤ人の歴史的状况を、各々の相違点に着目しつつ網羅的に分析していることにある。

本書は二二章から構成されている。著者は本書のまえがきで、一九世紀を、「たゞえ議論の余地があるにせよ、ヨーロッパ文化史上比類のない規模で寛容の精神が浸透した」時代として位置付けている。その姿勢が示しているように、第一章、第二章では古代・中世にも目を配りつつ、主に近現代に大きな比重を置き、さらに第三章から第九章までは近代ユダヤ史における「受容の一九世紀」、第一〇章から第二二章までは「権利剝奪(排除)の二〇世紀」と規定して考察を進めている。このように著者が一九世紀を肯定的に評価するのは、一九八九年以後の中東欧を取り巻く状況と無関係ではない。つまり、体制転換以後に中東欧各国で噴出した反ユダヤ主義への著者なりの

応答という意味合いも本書には込められているのである。以下、本書の核となる「受容の一九世紀」、「権利剝奪(排除)の二〇世紀」の各章を取り上げ、その概要を紹介したい。

中世ヨーロッパに見られたユダヤ人とキリスト教徒の社会的分離は、ルネサンス、宗教改革、絶対王政期における重商主義政策、さらに啓蒙主義の流れの中で、次第に両者の融和へと転換していった。このルネサンスから啓蒙主義の時代に創られた両者の融和的關係を下地にして、ユダヤ史における「受容の一九世紀」は始まる。「受容の一九世紀」を扱う各章では、フランス革命を震源地として中東欧にも拡大したユダヤ人解放の法制化のプロセスと、解放後のユダヤ人の状況について考察がなされている。従来の多くの研究者が明らかにしたように、特に一九世紀後半は、ユダヤ人の法的地位の向上とそれに伴う資本主義経済への適応によって、ユダヤ人が積極的にホスト社会への「同化」を模索した時代であった。しかし、著者はこの「同化」過程を「宗教的伝統からの離反、すなわち文化変容でもって始まり、文化的独自性の修正や

放棄、あるいは周囲の生活様式や支配的な価値、及び文化への適応に示される」と明確に定義した上で、中東欧のユダヤ人の「同化」過程は不完全かつ多様性を含むものであり、多くのユダヤ人が二重のアイデンティティを維持していたと指摘している。さらに本書は、中東欧のユダヤ人が宗派、経済資本、文化資本において大きな差異を示していたにもかかわらず、コミュニティの枠組を超えた有機的な結びつきも創出していたことを、鮮やかに描き出している。

しかし、一九世紀の最後の二、三〇年には、「受容の一九世紀」も動揺を見せる。反ユダヤ主義やシオニズム運動の芽生えは、来る二〇世紀のユダヤ人の運命を予見する現象であったといえよう。本書のもう一方の核となる「権利剝奪（排除）の二〇世紀」の各章では、戦間期のソ連、中東欧諸国におけるユダヤ人の状況について考察がなされている。著者が「権利剝奪（排除）の二〇世紀」としてこの時代を規定するよう、一九世紀にユダヤ人に与えられた寛容の精神は、地域や時期に偏差はあるものの、全体としては著しく損なわれることになった。例えば、ハンガリーにおいては一

九二〇年に、大学と高等専門学校への入学比率を総人口に占める「人種及び民族」の割合によって決定する「就学制限法」が制定された。さらに、同国における一九三八年以降の一連の「ユダヤ人法」は、ユダヤ人から市民的権利を剝奪し、差別の制度化を完成させた。ここでも著者は、これらの措置を「ハンガリーの社会・経済関係を共に創造してきた数百年の運命共同体を破壊した」行為として捉えることにより、一九世紀におけるユダヤ人への寛容の精神、及び「ハンガリー人とユダヤ人の共生の記憶」をいっそう際立たせようとしている。

以上、概略的ではあるが本書の内容を紹介してきた。前述したように、本書の大きな特徴は中東欧の各地域を網羅的に分析している点にある。むろん、本書の考察対象は中東欧の諸地域にほぼ限定されており、さらに地域によって考察の深度に相違はあるものの、中東欧のユダヤ史を多様かつ相互関的な視点のもとで描き出している著者のスタンスは、日本の東欧史研究に有益な示唆を与えるだろう。なお、訳者の寺尾信昭氏は、近現代のハンガリー社会とユダヤ人との関係を分析した論文を多数著して

いる。著者のプレブクと専門が類似していることもあり、訳者の翻訳は非常に丁寧かつ読みやすく、専門的知識が必要な箇所には訳者による詳細な注が施されている。さらに、巻末に参考文献一覧と地名要覧が付録されていることも、初学者にとっては非常にありがたい。本書が、中東欧のユダヤ史を概観する上で便益な書物となることは間違いない。

(A五版 二五二頁 二〇〇四年三月)

彩流社 税別二五〇〇円

(小川隆司 京都大学大学院文学研究科修士課程)